

パルシステム連合会の女川地区炊き出し

10月22日、宮城県牡鹿郡女川町の女川第一小学校では、あいコープみやぎとパルシステムグループ（パルシステム連合会、会員生協、関連会社＝パルシステム）による炊き出し支援が行なわれました。

230人分の国産牛肉（提供：福永産業）やエリンギ、舞茸、ピーマンなどの野菜類を炭火で焼いてふるまったほか、炊き立てのご飯にクリームシチュー、ヤキイモなどを提供したのです。あいにくの雨模様でしたが、温かい料理を用意したことで、被災者の方々には喜ばれました。

パルシステムは、友好生協であるあいコープみやぎと連携して、3月末から被災地への「食」の支援活動を継続しています。女川町は未だに避難所暮らしを強いられる人々が多いため、10月13～16日と10月20～23日の2週にわたり炊き出し支援を行ないました。

女川第一小学校の校舎を利用した避難所には25名が、校庭に建てられた仮設住宅では57世帯が暮らしています。被災者の方々に21日はデザートを配り、翌22日は食事を提供。避難所では火を使った調理が制限されていますので「焼肉を食べたのは久しぶりです」と笑顔を浮かべる人が数多くいらっしゃいました。

今回の行程は3泊4日。パルシステムの支援メンバーは20日に仙台に到着し、あいコープみやぎの本部で現地（女川町）の様子を聞き、役割分担などを打ち合わせ。21日は女川小学校でフルーツを配ったあと、実際に現地の様子を視察しました。22日は朝から炊き出し支援を行なったあと仙台に戻り、23日はまとめのミーティングというスケジュールです。

3月末からつづくパルシステムとあいコープみやぎの連携による「食」の支援活動で、両生協の絆はますます強くなっています。当初は石巻市で炊き出しを始めましたが、その後活動地域を女川町まで広げたのも、あいコープみやぎの理事から「女川が厳しい状況です」と聞いたことが発端です。

パルシステム連合会・執行役員の渋澤温之（しぶさわ・あつし）さんは「あいコープみやぎの職員だけでなく、理事や組合員も常に同行してくれます。われわれだけで現地の情報を入手することは不可能ですから、頼りになります」と話しています。

これまで現地の炊き出し支援に参加した職員は、パルシステムだけで140人以上にのぼります。しかし、パルシステムは炊き出しに関するマニュアルを「あえて」作っていません。

その理由は「参加した個々人が自分の頭で考えてほしいから」と渋澤さん。被災地のた



炊き出しがスタート。

シチューとごはんを手渡す支援メンバーたち。

めに何かしたいと自ら手を挙げた職員の意味を尊重すること、さらに状況判断力や対応力が身につく機会にもなるためです。支援メンバーの中で隊長を1人選び、その指揮のもとで支援活動は行われています。

女川町の炊き出しで隊長を務めたのはパルシステム連合会・商品管理本部の廣田久雄(ひろた・ひさお)さん。

「ほんとうはもっと早く来たかったのですが、私の勤めるセンターが被災し、その改修工事などがあり、延び延びになっていました」と言う廣田さんは、今回初めて被災地を訪れました。隊長の仕事について聞いたところ、「みんな自発的に動いてくれるので、隊長と言ってもたいした仕事はしていないんですよ」と笑って話してくれました。



焼肉が間に合わない！
必死で焼きつづける支援メンバーたち。

見ず知らずの職員同士が「被災地のために」と取り組むこと。それによってグループの結束力が高まるという側面もあるようです。

パルシステムの関連会社、株式会社ジーピーエス・管理本部の太田幸司(おおた・こうじ)さんは2度目の参加。前はゴールデンウィーク中に石巻市を訪れたそうです。「阪神・淡路大震災を経験している私には他人事ではなかったのです」と言う太田さんは、現地で一緒に支援にかかわることで「面識はなくても同じ思いや目的を持っている職員同士なので、すぐに打ち解けられます。それぞれの職場の、現場担当者しか知らないような情報も交換していますよ」と教えてくれました。

パルシステム連合会・人事部部長の堀籠克衛(ほりごめ・かつえ)さんは、長期間支援しつづけられるような体制をどう構築すべきか、思案中です。「復興までは相当な時間がかかるでしょう。とすれば、たとえば被災地での支援活動を研修制度として組み込むなど、組織として息の長い活動をつづけていくための仕組みを考えなければいけませんね」(堀籠さん)。

継続的な支援を行なうためには、被災地で何が必要とされているのかを正確につかみ、適切な手段を選ぶ必要があります。渋澤さんに今のニーズを聞くと「仮設住宅への入居が進みはじめていますので、新しいコミュニティーをどうつくっていくかが大きな課題です。そして、われわれがむやみに押しかけるわけにもいかないので、どういふかたちで携わることが最適なのかを慎重に考えていく必要があります」と教えてくれました。

あいコープみやぎ・専務理事の多々良哲(たたら・さとし)さんも異口同音にコミュニティーづくりの大切さを挙げました。「いま被災地では避難所は次々と閉鎖され、仮設住宅への移転が進んでいます。しかし、避難所ならば何が必要なのか、見ればある程度わかったのですが、仮設住宅は見えない部分が多いので、ニーズをつかむことも難しくなってい

ます。1つ言えることは、仮設住宅でのコミュニケーションが大事だということ。私たちが焼肉を準備したのは、バーベキューのような場をつくることで被災者同士のコミュニケーションが生まれることを期待しているのです」(多々良さん)。

避難所の生活でいったんできあがった人と人との結びつきは、仮設住宅に移ることでまたゼロからのスタートとなります。もう一度、人のつながりをつくるためには、支え合いと助け合いを目指して立ち上げられた生協という組織ならではの支援の仕方があるはずです。

多々良さんがおっしゃった「息切れしないでかかわっていく」という目標に向かって、パルシステムとあいコープみやぎはこれからもさまざまな支援を継続していく予定です。



女川第一小学校に多くの方が訪れ、
シチューと焼肉を楽しんだ。